

旅は着けば城のある町で青葉ごろで  
おまつり、月の光笛につれてくる

三井不二雄

一雨空気を透明にした夕べの遠い山なみ  
月夜遠くまで白浪のつづくをきびの穂風ふく  
焼跡井戸は残つてゐて水汲んでゐる春

和田靈南

柿の花は朝から雨で娘さんはだしで通る  
嵐の前のかぜたち岬のはづれはたけしてゐる  
蟻が眞黒に集ひ地べた乾ききつてゐる  
木槿が月に花をもつてくるころは

永田杏平

颯風もここらは木の葉が落ちてゐるだけの、あめ  
日ざかり日かげのあさがほのはな一輪  
水にうつりて、さらさらと流れてゆく大文字の、消えてゐる  
つきがあるの、でくさのなかみちがあるの、で  
うみがいつばいにつきよとなる  
いしのはだにふつてゐる

内藤英夫

山があり村がありたばこ畑がつづいてゐる月明りです  
いもの葉くびふりくびふり新聞配達のもんぺさん  
落花生の黄色なはなも風のない夕日のはたけ  
みそはぎ、夕焼雲がうつるきれいな水

中村秋夫

桃の匂ひが道は桃の木、のそばを通り月夜  
夜に入つて風が落ちた月あかりの障子葉の降り  
日だまりはほんにあたたかに青い菜もある  
ころろぎなきやんでゐる古い英書の厚み  
はれては降りかかる街の映畫館も秋の夕くれ  
月が山をはなれると淺瀬の石ころ

中西國友

日野素木

鈴木單衣女

山根志乃竹

山根志乃竹

土地問題はしぜんと解決して、少くとも一  
家が一町五反といふ各家適正農地を保有す  
ることとなつた。又、同村は、イビ長良の  
兩川に包圍された低濕地帯であるにもかゝ  
らず、電氣設備の干拓工事をして新田數  
十町を得しめた。其他に、精米、製粉、製  
糶、農具修理など農村必要の工場を新設し  
た。で、現に、反當りの收穫も甚だ成績好  
く、供出米も縣下屈指の比率を示してゐ  
る。去年、君の主唱に依つて結成された農  
民組合は數百の組合員を結合して、諸方に  
ありがちな地主との鬭争を後ろにして、  
日本農村再興の建設的活動にはげんでゐ  
る。文化運動としては「大江村塾」が君の  
構想のもとに發足してゐる。又、この村は  
交通にめぐまれない爲にヤミの買出人も來  
ないから、ヤミ景氣といふような不明朗な  
ものはない、しかも農業會預金は正規のル  
ートで販賣した金高で三百五十萬圓を越え  
てゐる。東大教授、那須浩博士も縣の關係  
者と共に同村を視察して、まことに模範農  
村と稱するに足ると、折紙をつけて行つた  
そうである。けだし、青史君が村長として  
農會長として指導よろしきをえた結果なの  
である。去る二月十一日に君の表獎式が同

桐の青い實がたわわになつてゐる役場休日  
今宵七夕の、石に水うつ

加藤白水境

月代灯は山のお墓へ灯をあげに行くので  
雲の流るるさまは、草に咲くあさがほ  
くも、あみはりをへてすずんでゐる  
へそだしてとほのいたかみなり  
はれて虹の橋へ漕いでゆく

廣田不知火

庭木の影月が籐椅子に來てゐる  
山寺のさるすべりは赤しそして日のくれ  
仕事一日終つた空の焚火してゐる  
晴れて製材所の音が木の葉も冬になる  
草に牛を涼ませせてゐる月となる

水田潤

水野田々詩

古いすだれを出して夏になることしも  
冬夜山の油繪ある部屋に待たされてゐる  
みづうみ見えてきて涼しく林の徑下りにつく  
梅の實落してしまつた星の暗い夜ばかり  
かみなりあばれる馬はうまやにておとなしく

増田折莖子

高橋政二

母へ戻つてお盈の配給酒のちよつぱりを呑み足り  
霜のはげしく日ざしの裏見ゆる遠山雪  
茂りて高い山低い山、霧のころの白雲のもりあがり  
濡れてゐるのも紫蘇畑  
たべられる草たべられない草咲いてゐる  
ひぐらし一つ鳴いて油壺といふ入江隅々からくらくなる  
虹かけた松の雫の土におちる

桐井葦彦

渡邊伊佐雄

まあちゃん椰子の團扇おいてあほぐでもない

村に於て舉行されたそうである。

私は四五年前、青史君の伊曾島の別宅を  
訪問したことがある。「青蘆双曲」といふ  
習作を發表した時だ。伊曾島といふのは、  
木曾川と長良川との下流にあるデルタであ  
つて、自然のまゝでは農耕に適しない土地  
であるのを、君の祖父が當時、巨萬の私財  
を投じて、防波堤を作つて、廣大なる新田  
としたのだそうである。君は祖先以來、公  
益事業のためには、私産をなげうつて、衆  
庶に利せしめるといふ傳統をもつた家にな  
まれてゐるのである。此春、君の功績が世  
の中に認められたことを祝賀すると共に、  
今後とも一そう君の活動を祈つてやまない

○ 前號の此の欄に書いたことだが——國民  
學校の新教科書に取りあげられた、社友佐  
藤專子君のむすこさん、允君の自由律俳句  
は、此の新學年から（多分、四年級の第二  
學期に出てゐるのだらう——まだ本は見な  
いが……）教室でおしえられぬことになる  
が、これには先生がこまるだらうとおも  
う。どうして、こんな散文みたいなものが  
俳句なのであるか、それを俳句としてはど  
ういふ風に説明したらばいゝのか、まるで

おん眼おんくちびる観音様をおがみまする  
病院のよるは青い星もでおやすみなさい  
空がちかくなつてたべてる  
空にぼつかり雲をおいて山で話して山ぐみ  
山もこのへんでいつぼんきつて杖にしよう  
いなご稻の穂に、東京の話などきいてる  
朝はすがすがしパンの焼ける匂ひ雀が鳴く  
寫經に窓あけはなちひまわりの花の大きく  
書齋とおぼしく更けて灯の雪に洩れてゐるところ  
とびが輪を描いてゐる雲の雷氣してゐる  
松の木青々とぶらんこがしんかんと冬  
どの家にも柿の、木の上青い山であり雲かかり  
焼跡には菜園が青くて冬の朝健康體操  
玉葱が吊してあつて古い簾に日中の風も  
花がもう夜の明けたカボチャのつる  
せみのこゑも昔殿様のおやしきの松  
颯風は來ないらしい雲も波も、帆を下す  
一輪の花をはなれぬ蝶峠は風ふく  
焼けた家にもあつたいちじくの木があつて一年  
畑にも好い雨のお祭の酒をのむ晝なか  
夾竹桃けふもむらむらと白い雲がある  
夕立がにじかけた栗色の馬ひいてゆく  
暮れないうちは製材所の音のとうもろこしの葉  
若い女に聴診器あててゐる窓があきのあめ  
お墓はひがん花が咲く父の忌日でもある

平田定市郎

柳澤白草

白石黙忍冬

渡邊天仙果

坂田義三

入江功一

梁瀬阿羅與

池邊象外子

木曾波風子

皆川青鈴子

長谷川勝好

梅木成敏

古賀サダエ

ケントウがつくまいと思う。だが、これは  
ぜひ正しくおしえてもらひたいものだ。い  
いかげんな取りあつかひ方をしてもらいた  
くない。そればかりか、この教科書にある  
自由律俳句をもととして、兒童に自由律俳  
句をつくることをおしえてもらひたい。そ  
のできとうな指導をしてもらひたい。その  
點で、わたしも進んではたらきたいと思  
う。ごくてじかなところで、私の居る大船  
と鎌倉との國民學校の先生がたが、さつそ  
く、新教科書の俳句の味ひ方と、その教へ  
方といふことを話してくれといふので、近  
日のうちに、どこぞへ集つてもらつて、そ  
の談をするつもりだ。社友の矢内樹一君が  
福島縣教育會の仕事をしてゐる關係から、  
福島縣下の國民學校へ談にきてくれないか  
と、申越されてゐる。縣内を一枚々々、講  
演行脚をする時間もあるまいけれども、七  
月頃、都合がつけば出かけてもいふと思つ  
てゐる。こうした啓蒙運動は此際、全日本  
的に展開したいのだが、私一人ではどうて  
い手が足りない。社友のうちで、學校方面  
に關係のある方は、この仕事に乗り出して  
くれるといふ。これは、われ／＼の層雲の  
道といふものゝ、種をまくといふ意味で一

白い雲と雲がところどころだんだん島はごまの花盛りで  
 水蓮と雲があつて、池の邊の子どもたち  
 トマト、手のひらにひとつある  
 薯の花に雨降る家に着けば日ぐるる  
 平かに満ちみちてここにも島あり  
 朝がうすぐもりして油ぜみなくとおぼんもちかく  
 賣聲も久しぶりなあさりあせりと夜明けたばかり  
 なんにもないものの平和になつた祭のふえ  
 よい雨がすぎたよい空の蟹のはさみ  
 麥の穂一本挿してあるこれがわたしの部屋  
 川が月夜で道が月夜で家がある  
 海べすすきの穂となりそろひ商船學校夏休み  
 かまどばちばちはぜる音の夜明け月夜  
 背をむけられてかつこうが啼く  
 道がひるのやうな月へ行く道のひそかな  
 初秋の夜の星のやうなゆびわのガラスの光  
 まんまるな月が山へ來、夜汽車が家に近くなる  
 鉦の音で御詠歌でお月さまが膝にきてゐる  
 あれから幾歳のぐみのふさ掌にうけて見る  
 われ肥になふこの仕事を得たり山々秋  
 月影が黒い教會の門を出たところ  
 生きてかうしてまた會うてきてきりりの味  
 ここ青根の尾根つづく尾根のむこうが夏の海とて  
 少女ら白いボール音たてて測候所ある風景  
 暑くなる空が青くて煙の出ないえんとつ一本

木村 洋子

長谷部 丁字路

東 草二郎

下田 麥

長谷川 善一

走内 庭草

吉村 しをり

森田 和夫

岸田 重遠

蓮見 牛里

中村 和たる

杉原 明雄

ばん好い仕事である。學校の先生が、ほ  
 とうに自由律を理解してくれば、兒童の  
 心に自由な物の見方、自由な書き方といふ  
 ことの目を開く、俳句といふものゝたまし  
 いを育てることになる。それは、小にして  
 も、我々の層雲の道を廣くすることである  
 し、大にしては、日本の古い封建主義的な  
 考をすてて、自由主義といふことの正しい  
 認識をふかめることにもなる。私も、時間  
 のゆるすかぎり、力をつくすから、諸君の  
 うちでも、こういふことの出来る方は大に  
 はたらいてもらひたい。

それから私は、國民學校の先生がたのた  
 めに、新教科書の兒童俳句の取扱ひ方と、  
 自由律俳句の味ひ方とを指導した一冊の本  
 を書きかけてゐる。すでに、七十枚ばかり  
 は原稿ができてゐる。二百枚ぐらゐまで書  
 き上げて、手ごろな本にして、國民學校の  
 先生の全部に讀んでもらひたい。又、これ  
 を讀んでくれなくては、新しい教科書の俳  
 句はどういふ風に教へていゝか解るまいと  
 思う。紙の不足な時だから、原稿だけ出來  
 ても本になることは早急にはゆくまいとも  
 思うけれども。……



ひるねすごしてひでりのにがうりのはな咲く  
 向う山には日でりつづきの日をのこして夕べお盈近いとんぼ  
 いいおしめりでわらやくれてゐる  
 てんと虫とトマトのこんな小きなのが朝  
 ポンポン船の隅には蠶もあつて四五人これから島に行きます(長島愛生園)  
 さるすべりの赤う咲けばお寺の薬やね  
 冬山の線が暮れてからもあかるい角のポスト  
 新月、暮れた風の(ハ)モニカ吹いて通る  
 爽ふみしてゐると下りてきて雀よからつ風の中  
 口笛ふくやうな氣も窓から松林の今日は雨  
 川の水濁るこの頃瓜の味甘し  
 朝日さわやかにさして木肌の蜂、蟻もゐる  
 女の子仲よく一つの傘に蛙鳴いてゐる  
 とんぼは陽にういてとんでもろこしの葉  
 月夜みちばたともしてお祭してをる  
 月はあつて照るでもなくじやがいの花  
 青葉涼しく天道蟲掌にのせて見る  
 秋は山の稜線あきらかに麥種をまく  
 星座讀んでゐるうちは手にして日本にゐる  
 降つたあとの日ざしがくちなしの花の匂ひで  
 梅の實ことしも障子はづすことを  
 雲がいつまでも夕焼の牛ひいて通る  
 大根もかぶらもまいて宵の早寝  
 枯木が浮いてゐる水に青空釣れそうです  
 風そよそよと木の葉すでに夜明け

山田こころ  
 片桐光成  
 細田敏子  
 片桐經子  
 片桐弘子  
 大山多石  
 中野弘雄  
 福本逸子  
 岡本流一  
 鎌田一相  
 木村樟樹  
 飯田三茶  
 小澤養心王  
 杉本一楊  
 小川環  
 平賀夕星  
 酒井健之  
 鈴木敬三  
 山口草露  
 神山かぎり  
 森景諫郎  
 松井柳城  
 齋木丘家  
 近藤紫水

いま、日本で印刷用紙のフッテイしてゐることは、おどろくべきほどである。國民學校や中等學校などで、新學年に使ふ新しい教科書が、紙のないために印刷することが出来ない。大新聞社では、新聞用に配給されてゐる紙の一部をさいて、(その爲に新聞が一週に二回、小形になるのだが)教科書の印刷にふりむけるといふ有様である。大きな出版業者や大きな雜誌社では、さうとうにストックをもつてゐたのであるが、それも使用する一方で、その補充がきかないから、どこも手持の底をほいたらしい。私の著書でも、去年以來、わりあひとトン／＼拍子に出版されてきたのだが、このところに至つて、行きつまつたらしい。「秋晴」だけは四月のはじめに、やうやく出來た。「耳順の書」といふ一冊は、六月中に出來るだらう。此の二冊が出るのも殆ど奇蹟のやうなことだ。こんな風だから、新刊書といふものは、當分おそろしく少くなる。本のキキンがくるにちがひあるまい。

さうした情勢の中にあつて、前から着手してゐたこととは云へ、「屏雲第十八句

炎天祭の太鼓とどろと波の寄る  
 月あかりする一むらは砂糖黍なるか通る  
 霧の一番番どりが鳴いてゐる  
 雪のアルプスの麓の小さい町の店の灯り  
 風元日の比叡の夕空となる  
 山根の麥島の雪を静かに踏んでゐる  
 この道一すぢ冬の山が日あたり  
 棧橋の下は白い貝がらの日に透けて冬朝  
 こたつでうまくてつめたい柿の親一人子一人  
 柿の木に柿の實のびつしり子供柿もつてゐる  
 いつしか年の底となる石臼ひく音が雪空  
 凍るらしくて今晚細い月がはねつるべ  
 目高のゐる川傘さして行く  
 沖あげの雲がいくつもお使に行つてきます  
 ほほづきが赤くなります田舎は盆  
 雪の日くれてもカントンチンとかぢやさん  
 めらめらともえる火にカンナの赤さを  
 荷車かたかたと高黍の中灯す家  
 うちで熟れたトマト皿にあり夕餉とする  
 下葉のかれた南瓜棚の向うのうちの子  
 七夕の竹きつてきてゆうべあねいもうとふたり  
 からすがあるく渚を女とあるく  
 今日の暑かつた日の鉄を洗つて十葉の花  
 巖には松が雪をおとさずに立ち静かな波  
 花火や大鼓やまろい月頭の上にしていく

森 英生  
 望月 皓  
 渡邊無患子  
 中原紫保子  
 林 昭一  
 阿部昇吉  
 松本東天紅  
 橋本光男  
 横瀬碧山子  
 竹内孤明  
 栗田千可志  
 古川紅雲  
 大町桃水  
 古山富朗  
 野崎忠雄  
 仁平青蛾城  
 越野初枝  
 尾畑豊舟人  
 上田隆一  
 後藤安喜貞  
 中村敏喜  
 北條砂丘  
 竹久清信  
 並木綠朗  
 加藤運治

集」と「層雲第十九句集」とが出来上つた  
 ことはうれいのである。但し、頒價が、  
 前に層雲に廣告をしておいた價では、非常  
 なマイナスになるために、前金を預つてお  
 きながら、頒價を改訂した。相すまぬ次第  
 であるが、事情を諒としていたゞきたい。

ところで、層雲は、去年の六月に復刊第  
 一號を出してから、此の五月まで滿一年の  
 間に、この號を加へて五冊——六月號、秋  
 季號、冬季號、春季號、夏季號——しか出  
 せなかつたのはイカンであつたが、これも  
 何とも致し方がなかつたのである。たゞ、  
 ページ數を、他の大俳句雜誌が十六ペー  
 ジにおとしてゐるのさへある中に、少くとも  
 三十二ページ以下には瘦せなかつたことが  
 せめてもの申譯なのである。

とところで、用紙の拂底につけて、次から  
 の層雲がじゅんちように出るかどうか、と  
 いふケネンが諸君の心をくらくするのでは  
 ないかと思う。けれども、我々の道の根幹  
 となるものは層雲であるから、層雲だけは  
 どんなギセイをはらつても、出してゆくカ  
 タゴでもあり、又、その見通しだけはつけ  
 てゐる。

但し、一卷十二號といふしきたりを御免  
 こうむつて、此の號をもつて、第三十四卷  
 を満了といふことにする。

層雲第三十五卷の第一號は、六月のはじ

子どもが子どもの帯を結んでゐるはぎの花  
 ガラスばかりの病院である明るくて秋のあめふる  
 さで一ぶくの茶碗のかげの秋となりぬ  
 炎天これを摘む野草にいのちつなぐとて  
 戸ごとに烏賊ほしてゐるまちの黍の葉  
 つゆけくてもみよりの葉こほろぎ鳴いてゐる  
 流れこんぶひらふ子どもらも沖の夏雲  
 さみだるる老木この松の幹  
 通るのは復員船か秋晴れハゼが釣れてゐる  
 鳥が鳴いて鳴いて桐の木一本  
 ポンポン船も朝は春あさい空にういてゐる雲  
 青いりんごもでてゐます青空市場  
 おかあさんすずしさうにてがみをよんでゐる  
 つばめの子口をそろへてラヂオが歌つてゐるあさ  
 つきかかげのいしにすわる  
 月かげどの家もねてしまふたらしく  
 田圃に十日の月があつて子供の歌つてゐる道  
 島の渡しは二三人待つてゐて風ふく  
 雀雨にぬれて陶工は陶房から顔出してゐる  
 空色の空がある麥わら帽でゆく  
 稻の穂波の風は紺碧の海には白帆も  
 霜の朝にシヤツの洗つたばかりで  
 成恭さあんと辨當箱鳴らして追ひかけてきた子供達稻の穂波  
 電車の灯がチーアの灯が遠くてこの家高くて涼んでゐる  
 水のうたふ唄、乳色の朝霧のこゆく

小林秀洋  
 鳥居光子  
 都山海人  
 木庭時雨  
 岡垣整明  
 中村伊知郎  
 秋谷照  
 田中無絃  
 星野あきら  
 服部小太郎  
 小野勝次郎  
 永井喜太郎  
 北田乃木彦  
 田中一路  
 小林晃夫  
 山村涼風子  
 中村保  
 細江隆人  
 鈴木梅宇人  
 中野弘雄  
 村上荀生  
 湯淺影外子  
 無着成恭  
 木村ツギ子  
 門藤康生

めに出す豫定である。こんどは、経営及び  
 編集の双方に於て、まったく機構を新にす  
 る計畫が、今、ちやく／＼すゝめられてゐ  
 る。つまり、「層雲」といふものがすつか  
 り若かえることになる。

社中より 俊二

好い季節になつて、汽車も樂になるので  
 井泉水先生も旅行の計畫をたててをられ  
 る。五月は千葉縣下へ小旅行、其地の學校  
 で講演もされた。六、七月のころ、愛知、  
 岐阜、京都、大阪をかけて關西へ行かれる。  
 その時京都で俳句大會の計畫がある。

鎌倉山の櫻にはまだ早い日であつたが、  
 谷津の會員、青夫新五郎橋火六々子白毫子  
 俊二に、千葉から逸子さんが加はり、山道  
 を歩き、故蜻郎さんの山の家を訪ねた、昨年  
 枕頭に花があふれて咲いてゐたが、今は佛  
 前に咲いてゐる花のいろ／＼が淋しかつ  
 た。蜻郎さんは本名鈴木誠三、明治三九年名  
 古屋に生れ、日本大學美術科卒業、中學時代  
 から胸を病み療養をつゞけてをられた。そ  
 の間に南知多方言集を刊行された事は當時  
 層雲に井師が紹介されたことがある。抱壺  
 句集三羽の鶴は蜻郎さんの勞によつて上梓  
 されたものである。戦争中竹中工務店で執  
 務、責任の地位にあつたので多忙、遂にた

こたつにはハイネひろげたままで正月雪となる  
 パラツク並んで寒ソの朝、富士がある  
 この邊がよいとねころんだところが小春  
 赤い頭巾の雪の中の子供母が呼んでゐる  
 雨のやんでゐてあかるきはうちへ手紙が来てゐる  
 銀杏黄色くなるると落ちはじめた黄色く  
 乙女の胸のふくらみを、街路樹の風が夏  
 風のない冬の日のたこが置いてある  
 しぐれたらしい砂利のぬれた博物館を出る  
 地震ももうない日のあたたくて麦を踏む  
 借りた本は押花してあるところまで讀んで冬の夜  
 地べたに線を手らがもうみえない線をひいてゐる  
 年もを、はりの町中を犬もゆぐ  
 山茶花壁土を練るに暖かくねつてゐる  
 訪ねてくれてかへる道の青い麦、ふりやんでゐる  
 水田 水田を吹く風吹かれて通る  
 ひつそりとおいて籠、口ぶえが目白よんでゐる  
 ふつてやんで圓い井戸一つ  
 考 査 は、 静 か な 朝 日 に  
 霧 の 中 に 日 が 出 る 百 舌 の 鳴 く  
 雨のあがつたばかりの夕空トラツクを洗つてゐる  
 小石みな濡れて丸いかたち冬の雨あたたかく  
 下駄の音が来て霜夜らしくすぎていつたこたつ  
 山なみが秋の末である久々に橋の上  
 霜どけて枯草のぬれいろ橋を渡つてゆく

安藤 香 心  
 夷石 龍 樹  
 進藤 一 孝  
 木 檜 白 虹  
 中 村 威  
 齋 藤 浩  
 飯 田 三 茶  
 三 井 澄 雄  
 前 田 昭  
 川 口 水 子  
 小 谷 秀 雄  
 岸 田 谷 川 水  
 平 位 阿 木  
 三 枝 重 峰  
 丹 羽 井 峰  
 平 野 櫻 桃 子  
 桑 田 義 人  
 森 田 松 枝  
 西 田 柿 穂  
 松 下 千 秋  
 田 中 茂 夫  
 北 村 九 泉 子  
 神 山 文 太 郎  
 木 下 思  
 東 草 二 郎

ほれられた。昨年四月八日だつた。享年四  
 十一。寶林院釋誠恩居士。墓所は名古屋で  
 ある。

平田定市郎氏は惜しい人だつた。句はま  
 だ日淺くて作少いが、鹽釜の陶抄子氏に手  
 引されて層雲に入門、閃く鋭い芽が伸びる  
 として暇なかつた。福島縣三春町に生れ中  
 學在學中發病、それから療養生活だつた。  
 昨年夏の或日、短冊と筆とを所望して句を  
 書かれたのが辭世になつた。本號の觀音の  
 句である。其數日後の九月三日靜かに永  
 眠。享年二十。見性院禪心明定清居士。母  
 堂郁子さんと先輩松村邦夫氏によつて遺稿  
 集が編纂され近く上梓される。

層雲社は五月から京都へ移轉する。投稿  
 連絡すべて京都へ願ひます。

京都市東山區本町十五丁目  
 層雲社

## 層雲社移轉について

本社は五月から左記へ移轉します。今後は投稿送金等、編輯及び一切の事務に關しては新住所へ御送稿乃至御連絡下さいたくお願ひします。

京都市東山區本町十五丁目

## 層雲社

振替京都八一七八番

層雲社への御照會はすべて返信料添付のこと

## 層雲會内規

- ◎層雲會は井泉水先生を中心として自由律俳句を研究し會員相互の親睦をはかる爲のものです。
- ◎本會の會員には、毎月雑誌「層雲」を配布し、又隨時「層雲會報」を配布します。又隨時に俳句會、吟行會、研究會を開きます。
- ◎本會は會員五名以上あるところに地方支部を置きます。支部は其地方に層雲道の普及をはかられたく、本部として出来るだけの便宜をはかります。
- ◎本會の會員を分ちて、A會員、B會員とします。會員費、其他規定詳細は層雲社へ御照會下さい。

## 目次

文章	1
ほこり	1
たのしみ	2
可否の後	4
京都にて	14
鎌倉たより	22
社中より	30

## 俳句

羽後と越後	井泉水	20	
甲斐と信濃		21	
麗日	井泉水選	4	
明日	境	井泉水選	18

(表紙 鈴木信太郎)

## 投稿略規

- ・投稿は誰でも自由
- ・俳句は一人一月一稿
- ・句數は一般は五句迄
- ・句稿の添削を望む方は別項内規に依る
- ・用紙は半紙二ツ切大のもの一枚に五句迄、楷書清記、二枚以上は左上カドを綴る
- ・締切は毎月十五日
- ・投稿先 層雲社編輯部

## 層雲 第四〇八・九號

昭和二十二年五月二十五日 印刷  
昭和二十二年六月一日 發行

編輯兼 發行所 萩原 藤吉

印刷所 森 藤 里 見

東京印刷株式會社

發行所 神奈川縣大船町山之内一五三四

東京印刷株式會社

東京印刷株式會社

日本出版配給株式會社

定價金十圓(送料一・二〇圓)

有隣亭藏書



讀書くらぶ取扱 ○印は最新刊

○層雲第十八句集	限定會員本	三〇圓	送料三・六〇
層雲第十九句集	限定會員本	三〇圓	二・四〇
○層雲第二十句集	限定會員本	三〇圓	
大泉叢書 春 蘇	頒 價	四圓	一・二〇
大泉叢書 青葉若葉	頒 價	一〇圓	二・四〇
日本叢書 向井去來	頒 價	二圓	一・二〇
隨筆集 私の綴り方	會員本	一三圓	二・四〇
句集 金砂子	會員本	一〇圓	二・四〇
句集 千里行	會員本	一五圓	二・四〇
○隨筆集 秋 晴	會員本	二〇圓	送料二・四〇
○隨筆集 耳順の書	會員本	五〇圓	五・〇〇
○童話 芭蕉さま類	價	一二圓	二・四〇

神奈川縣大船町山之内、一五三四  
振替東京三〇〇一七番、大泉園

◎井泉水先生の最新著書を優先的に入手する爲に「大泉園讀書くらぶ」があります。  
◎讀書くらぶ會員は隨時「くらぶ」宛に購買上の金を拂込んでおき、其の金の範圍にて優先的に發行圖書の送付を受けるのです。拂込は月を限らず、御都合よき時に隨時にて結構、但し一回十圓以上のこと。振替宛先は、「大泉園」とのみ記されたし。

昭和二十二年五月三日  
青木青彦  
中  
昭  
三

第三十四卷 第八・九號 昭和二十二年六月一日(毎月一回一日)發行 昭和二十二年五月二十五日印刷本 定價十圓